The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ケアリングの臨床哲学（報告）
Author(s)	堀江，剛；三原，悠祐
Citation	臨床哲学ニューズレター．2026，8，p．3-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103629
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第14回臨床哲学フォーラム：ケアリングの臨床哲学

ケアリングの臨床哲学（報告）

堀江　　剛・三原　悠祐

2024年10月19日、第14回臨床哲学フォーラムを大阪大学臨床哲学研究室主催で開催した。今回の臨床哲学フォーラムでは、韓国江原大学の「医療人文ケアセンター」から二人を招いて発表をお願いした。また、大阪大学臨床哲学研究室からは、大学院生が「ケア」に関連する研究発表を行った。趣旨・プログラムを示した案内チラシは次の通りである。

テーマ：ケアリングの臨床哲学 Clinical Philosophy on Caring
日時：2024年10月19日(土)13:00-17:30
場所：大阪大学豊中キャンパス全学教育推進機構 DAISEL Studio（Science Studio A）
主催：大阪大学大学院人文学研究科 臨床哲学研究室

・使用言語：日本語・韓国語（通訳あり）
・入場無料・申込要

人文学の領域で「ケア」はどのように考えられ、また実践されているのか。今回の臨床哲学フォーラムでは、人文ケアに関する教育プログラムを実施している韓国の江原大学医療人文ケアセンター（Medical Humanities Care Center, Kangwon National University）から二人の実践者を招待するとともに、大阪大学臨床哲学研究室大学院生の発表を加え、ケアに関する臨床哲学について意見交換と議論を行う。

プログラム

13:00-14:00　来賓紹介・挨拶（司会：堀江剛）

13:15-14:45
질병서사의 언어 분석 연구（病いの語りの言説分析を通した人文ケア）
Humanistic care through linguistic analysis of illness narratives
■ 発表者：JUNG Sung-Mi（Prof. Director, Medical Humanities Care Center, KNU）
■ 質問者：西村高宏（大阪大学）
■ 討論者：LEE Gi-Won（江原大学哲学科）・ほんまなほ（大阪大学）
■ 通訳：HA Rhin（大阪大学）

15:00-16:30
음악 경험을 통한 의료인문케어（音楽体験を通した医療人文ケアに関する研究）
Study on medical humanities care through music experience
■ 発表者：KIM Soo-Ah（Research Prof. Medical Humanities Care Center, KNU）
■ 質問者：沼田里衣（大阪公立大学）
■ 討論者：LEE Gi-Won（江原大学哲学科）・小西真理子（大阪大学）
■ 通訳：HA Rhin（大阪大学）

16:30-17:30
男性学とケア Men's studies and Care（남성학과 케어）
■発表者：三原悠祐（大阪大学臨床哲学、博士前期課程）
■通訳：HA Rhin（大阪大学）

以下では、まず堀江が「医療人文ケアセンター」の概要と背景を説明した上[1]で、韓国からの二人の発表内容について簡単に紹介する。その後、三原が自らの発表内容について報告する。

■ 医療人文ケアセンター

この組織は、科学技術情報通信部および国立研究財団の公募に採択された（2023年6月）プロジェクト機関の一つである。医療と人文学との連携を掲げ、疾病による患者の苦しみ、その家族および支援者などへのケアに関する研究・実践・教育を行う。方法論的な枠組みとして「病いの語りIllness Narratives」研究を軸に置き、ケアに関わる人々の「多層性」を強調する。すなわち、患者／患者の家族／医療専門職（医師・看護師など）／ケア提供者（ソーシャルワーカーなど）が様々な仕方で紡ぎ出す語りに着目する。実践的手法としては、６つのプログラム（文学療法・音楽療法・芸術療法・映画療法・哲学相談・ライティングセラピー）を設けている。主に大学医学部附属病院の患者・家族がクライアントになっている。また教育面では、医学部一年生を対象とした「患者とのコミュニケーション」と、医療人文ケア専門家トレーニングコースを実施している。

韓国では、若者の自殺率が高く、大きな社会問題となっている。そのため、政府もこの問題への支援策として積極的に助成金等を「ケア」の分野に割いている。しかも、医療系・福祉系のみならず、人文系と融合とした研究・実践の発展に力を入れているところが日本と異なる。江原大学には哲学科もあり、そこは「人文治療」の開発に取り組む拠点ともなっている。医療人文ケアセンターも、こうした政府・大学を挙げての取り組みの一環である。さらに言えば、江原大学のある江原道は韓国北東部に位置し、北朝鮮と長い国境を有する地域でもある。そのため、いわゆる「脱北者」も多い。脱北者に対するケアも、この地域での重要な課題となっている。今回の発表とは別ではあるが、発表をお願いしたJUNG Sung-Miさんは、このテーマに関しても研究を行っている[2]。

■ 病いの語りの言説分析を通した人文ケア（JUNG Sung-Mi）

発表は、疾病を患っている、あるいは疾病を患った経験を持つ人々に対してインタビューを行い、物語分析の方法に従って分析した結果の報告であった。そこでは、医療的言説でコード化された診断としての「疾病disease」と、病気の人自身の認識や社

---

[1] 内容は、2024年4月20日に開催された国際会議 2024 KNU Annual International Conference of Medical Humanities Care Center, Interconnected Healing and Care Educationの発表スライド “Medical Humanities Care & Musical Efficacy”（発表者：JUNG Sung-Mi, KIM Soo-Ah）に基づく。

[2] Jung Sung-Mi, Communication Humanities Therapy for refugees from North Korea, The 11th International Conference on Philosophical Practice and the 4the International Conference on Humanities Therapy (Proceedings of XI-ICPP & HT2012), Volume 2, July 16-19, 2012, pp. 305-317. 参照。

会的関係における病気の経験としての「病いillness」を区別した上で、後者の「病いの語り」に焦点を当てていることが強調されている。その語りは、当事者が人生全体を省察し、その意味を考え、新しいアイデンティティを見つけるきっかけを作ることに意味にある。人々が人生の物語を語るとき、人生のすべてを語ることは不可能である。そのため、自分自身を明らかにするこの物語を選択することになるが、自ら主題化する人生の物語は、自己同一性構成行為として含意を持つと言われる。

発表では、直腸癌および白血病で数年にわたる闘病を経験した二人（Aさん・Bさん）に対する事例が紹介された。分析方法としては、病いの語りを「疾病経験・感情・他者との関係・自己理解」という４つの側面に分類した上で、それぞれの特徴を記述・分析するものであった。疾病経験とは、徴候、痛み、傷の経験に対する表現を中心とする語りである。感情は、疾病経験の中で派生する感情表現、疾病宣告のショック、手術室での恐怖、治療後の再発への恐れなどを意識的・無意識的に表現することに関連している。他者との関係は、医療スタッフや、特に当事者の家族に対する関係を語った部分である。最後の自己理解に関しては、病いに対して自分自身を前向き／後ろ向きに評価することや、その変化が取り扱われている。

そこでは、様々な言葉が紡ぎ出される。例えば、癌の兆候を見逃してしまったことに対する後悔の念、言葉にならない痛み（いわゆる疼痛）をなんとか言葉にしようとする試み、病気が治らないことに対する諦めと、それでも冷静に人生に積極的に向き合おうとする姿勢、病名をあえて口にしないこと、家族に対する感謝の言葉、医療スタッフへの配慮の言葉、自らの闘病と老いゆく経験を「道」というメタファーを使って捉えること、などである。これらが、語られた際の言葉の抑揚、繰り返されるフレーズなども交えて詳細され、緻密な分析を加えられた。

このような「病いの語り」を詳細かつ具体的な表現とともに丹念に見ていくと、医療的な「疾病」言説によっては到底捉えきれない、極めて多様で豊かな「病い」の様相が浮かび上がる。発表では、言葉の細やか分析によって「病いとともに生きる」人の姿が示され、そうした複雑な事態に対する「ケア」の重要性と意義が強調された。

■ 音楽体験を通した医療人文ケアに関する研究（KIM Soo-Ah）

発表者のKIM Soo-Ahさんは、アメリカで音楽の勉強をしていた経歴を持つ。その関係で、医療人文ケアセンターでは「音楽療法」セクションの責任者を務めている。今回の発表では、音楽が感情的な経験を通した「内面的な禁忌の解放」という機能を持っていること、そこに焦点を当てた「ケア」の可能性についての考察が展開された。具体的には、がんによって身体的あるいは精神的な喪失を経験したがんサバイバーたちの音楽体験を探求することで、ケアにおける音楽体験の効用性を探ること、そのために音楽の治癒性を検討し、音楽体験を基盤とした医療人文学的ケアプログラムの過程を治癒的な観点から考察するものであった。

音楽には、過去の神話的な起源に向かう「回想的な側面」と未来の可能性に開放される「歓喜的な側面」があるという。この二つの矛盾した動きによって、音楽は人間

の内側にある種の衝動を起こし、無意識の中にある抑圧された欲望を目覚めさせる媒介となる。発表は、イギリスの精神分析医ドナルド・ウィニコットの「移行対象 transitional object」概念に着目し、音楽の媒介的役割を明らかにする試みであった。移行対象とは、乳幼児が特別の愛着を寄せるようになる対象で、毛布・タオル・ぬいぐるみなどを触ったり口に咥えたりすることで安心感を得る。それは、乳幼児が「自分は万能ではない」という現実を受け入れていく過程を橋渡しし、母子未分化な状態から分化した状態への「移行」を促すものであるという[3]。

具体的には、韓国の代表的な子守歌「島の赤ちゃん」が紹介され、移行対象と音楽（および歌詞）との深い関連性が示された。発表の場では、楽譜を示すとともに実際にKIM Soo-Ahさんが歌ってみせた。歌詞の内容は、次のようなものである。

母さん入江に牡蠣取りに
赤ちゃんひとりでお留守番
海のさざなみ子守歌
うとうと眠りに誘われる

赤ちゃんすやすや寝ているが
カモメの声に胸騒ぎ
かごを頭にそそくさと
母さん砂浜駆けもどる[4]

この歌詞が、移行対象との関連で次のように解説された。１節は、母親の不在の不安から子供は海が奏でる歌とともに眠りに落ちる。2節では、子供の眠りがカモメの鳴き声に転化し、その不安が母親に伝わる。転移した不安から母親は急いで家に帰る。この状況には喪失のトラウマが隠されており、子供と母親の間を循環しながら音楽が展開される。このように、悲しみと苦痛を表現すると同時に、新たな人生の始まりを告げる機能を持っている。音楽という遊びは、単に遊戯として理解されるのではなく、表現手段としてその時代の人物に伝達され、個人的、集団的な苦痛に耐えるように導いている。この哀悼の歌は、痛みを沈黙させない。苦しみは隠匿されると同時に、憧れの対象の存在を蘇らせる。

さらに、大学病院がん生存者支援センターでの取り組みが紹介された。プログラムの中で「島の赤ちゃん」をテーマにした歌の分かち合いが行われた模様、その後でのクライアントの語りなどである。こうして発表は、次のように結論づけられた。音楽は、言語では表現しきれない無意識の中の感情を顕在化させ、その感情を音楽の形式に合わせて表現する力を持っている。参加者たちは、音楽体験を通じて、自分の病気経験

[3] Wikipedia「移行対象」参照（2025年8月14日閲覧）。
[4] 作詞：韓寅鉉・作曲：李興烈・訳：船津健。https://heinrichfuna.jugem.jp/?eid=106 参照（2025年8月14日閲覧）。

による苦痛を歌詞で解きほぐし、それを未来への希望に転置した。この過程は、参加者が音楽活動を通じて痛みを昇華させ、音楽が与える共感と響きの中で心の癒しを経験したことを示している。これは、ケアの重要な役割を果たす媒体であることを示唆している。

■ 男性学とケア（三原悠祐）

本フォーラムにおいて、私は「男性学とケア」という題目で発表を行った。本発表におけるケア論としては、ケアの倫理と呼ばれる議論の数々や、フェミニズムの系譜の中で展開され、女性に過度に集中してきたケア負担を社会化する必要性を強調してきたものを指す。他方、男性学もまた、フェミニズムからの問題提起を受け、男性の特権と生きづらさの双方を分析する領域として発展してきた。私はこの両分野を交差させ、「男性によるケア」をめぐる困難と可能性を検討することを試みた。以下、発表の概要を簡単に記しておく。

まず、フェミニズムを背景にもつケア論は「ケアを性別に関わらず担うべき」と主張し、男性のケア参加を要請する。男性学においても、ジェンダー平等の促進や男性自身のセルフケアの観点から、ケアへの関与は推奨されるようになってきている。この点で両者は「男性によるケア」を肯定的に位置づけるが、私はそこに潜む難題、すなわちケア実践がしばしば「支配」や「男らしさ」と不可分に絡み合うという問題に注目した。

その具体例として、近年男性性研究や、ジェンダー政策研究において注目される「ケアリング・マスキュリニティ」を取り上げた。これは男性のアイデンティティを支配や攻撃性から切り離し、ケアや相互依存へと再編成しようとする概念である。しかし先行研究をみると、家事・育児に積極的な男性ほど、職場では競争意識が強く、女性観が差別的であるといった逆説的傾向も明らかになっているという。また日本の「イクメン・プロジェクト」に見られる父親像も、依然として「一家の稼ぎ主」という従来の男らしさを前提にしており、ケアを本来的な意味で価値化することとは距離があると思われる。こうした分析は、男性がケアに関与する際に「ケア」の価値が、従来批判されてきたような男性性に回収されてしまうような危険を示しているのではないだろうか。

さらに、介護研究の知見からも、男性が「家族を所有物のように捉える」態度の下でむしろスムーズにケア役割に適応する場合があることが指摘されている。つまり「ケア」は必ずしも支配性から自由ではなく、むしろ親和的である場面すらある。このことは、「善いケア」を男性が担うことの難しさを浮かび上がらせると同時に、ケア論そのものに潜む「支配」の契機をも照らし出しているのではないかと問題提起を行った。

当日の討論では、私の問題提起に関しては概ね共感的な感想が寄せられたと感じている。他方で、「ケア」という用語の多義性ゆえに、参加者一人ひとりが想定するケアの意味内容が異なっており、その点で認識の相違も見られた。発表者としてその交通整理をするに足る知識を持ち合わせていなかったことは心残りである。実際、この「ケア」の多義性は私だけでなく多くの研究者を悩ませてきた課題であり、今回も、まず

自分が考えるケアとは何か、どのような理論群を指すのかについて一定のスタンスを取れるよう努めていく必要を感じる契機となった。

今回の発表を通じて得られた最大の示唆は、「男性によるケア」というテーマが、男性の生きづらさの解消やジェンダー平等の実現といった、男性学に通底するテーマを超えて、ケア概念自体の再検討を要請する、強力な問題提起を含んでいるということである。現在も、男性学とケア論を往還しながら、従来のケア論をいかに批判的に捉え直せるかについて探究するに至っている。

（ほりえ・つよし、みはら・ゆうすけ）